

## 2025 年度口語詩句奨学生総評

西躰 かずよし

今回の口語詩句奨学生の選考で驚かされたのは、作品の水準の高さと、応募者の多さだった。短歌、俳句、川柳、詩など、幅広いジャンルから数多くの作品が寄せられたことをうれしく思う。上手く言えないけれども、若い人たちの表現への意欲が、世界を少しだけ、でも確実に豊かに思うから。

いつも言うことだけれど、この奨学生は、複数の審査員からの得票数が一定数以上あつた人が選ばれるから、選ばれた人は素直に喜んでほしい。でも、もし選ばれなかつたとしてもがっかりしないでほしい。ともかく、ここでは選ばれたかどうかは抜きにして、いいと思った応募作品を少しおあげたい。

くるぶしの  
淡いひかりを抱き寄せて  
聖書のように ねむるいもうと さいう

病棟の中庭ひかりあう五月 玻璃

心臓が鬼燈になるちょっと泣く 齊藤 葉

満員の電車に  
揺られるとき  
人は  
ひとしく牛乳瓶の明るさ 川上 真央

羊みな耳標を持って冬茜 ムクロジ

まずは、さうさん。自身の世界を描くという点では完結しているんだけれども、その世界がとても素敵だと思う。あと、失われそうなものを必死で守ろうとしている切実さが、作品からは伝わってきて、それが魅力のひとつになっている。次に、玻璃さん。実体験かはわからぬけれども、病院をモチーフにした作品に惹かれる。境涯を詠うという点では、自由律っぽい感じがしておもしろい。また、齊藤葉さんの作品は、話しことばをうまく取り入れた表現で、心情のリアルに近づこうとしているし、川上真央さんについては、世界と相対したときの、まぶしさのようなものを巧みに書いている（それは生きることのあざやかさへとつながるかもしれない）。最後に、ムクロジさん。作品からは、

批評家のまなざしが感じられて、そのうえで表現されるせつない描写に惹かれる。ほかにも取り上げたい作品は、たくさんあるけれども、紙面の関係上このあたりで終わりにしたいと思う。

さいごに。みなさんは、なぜ書くのだろう。僕は、表現するということは、たったひとりの読者へと向けられた、ささやかな営みだと思っている。もちろん結果的に、多くの人を喜ばすことはあるだろうけれども、最終的には、読み手と書き手の関係は、どこまでいっても一対一のものでしかない。だからこそ、それは切実で、ささやかなものなんじゃないかと思っている。だから僕は、書くことを大仰なものにしようとする人たちを、とここん憎悪するし、そういういた圧力に対しては、断固として否と言いたいと思う。

君たちはどうだろう。太宰治が「道化の華」に書いたように、復讐のために書くと言ってもいいし、糊口をしのぐためとか、名誉のためとか言ってもいい。書く理由なんて、ほんとうに何でもいい。ただ、君たちが書き続けるなかで、それぞれが自身の書く理由を見つけてもらえたなら、うれしく思う。それが見つからないまま、書くことを止めたって、生きたことは残るから、それはそれでいい。けれど、もし、書いている君たちがそこにいるなら、いつかそれが見つかることを願って止まない。僕もそれを探しているから。